



TITLE:

静脩 Vol. 53 No.4(2017.1)[全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 53 No.4(2017.1)[全文]. 静脩 2017, 53(4)

ISSUE DATE:

2017-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218244>

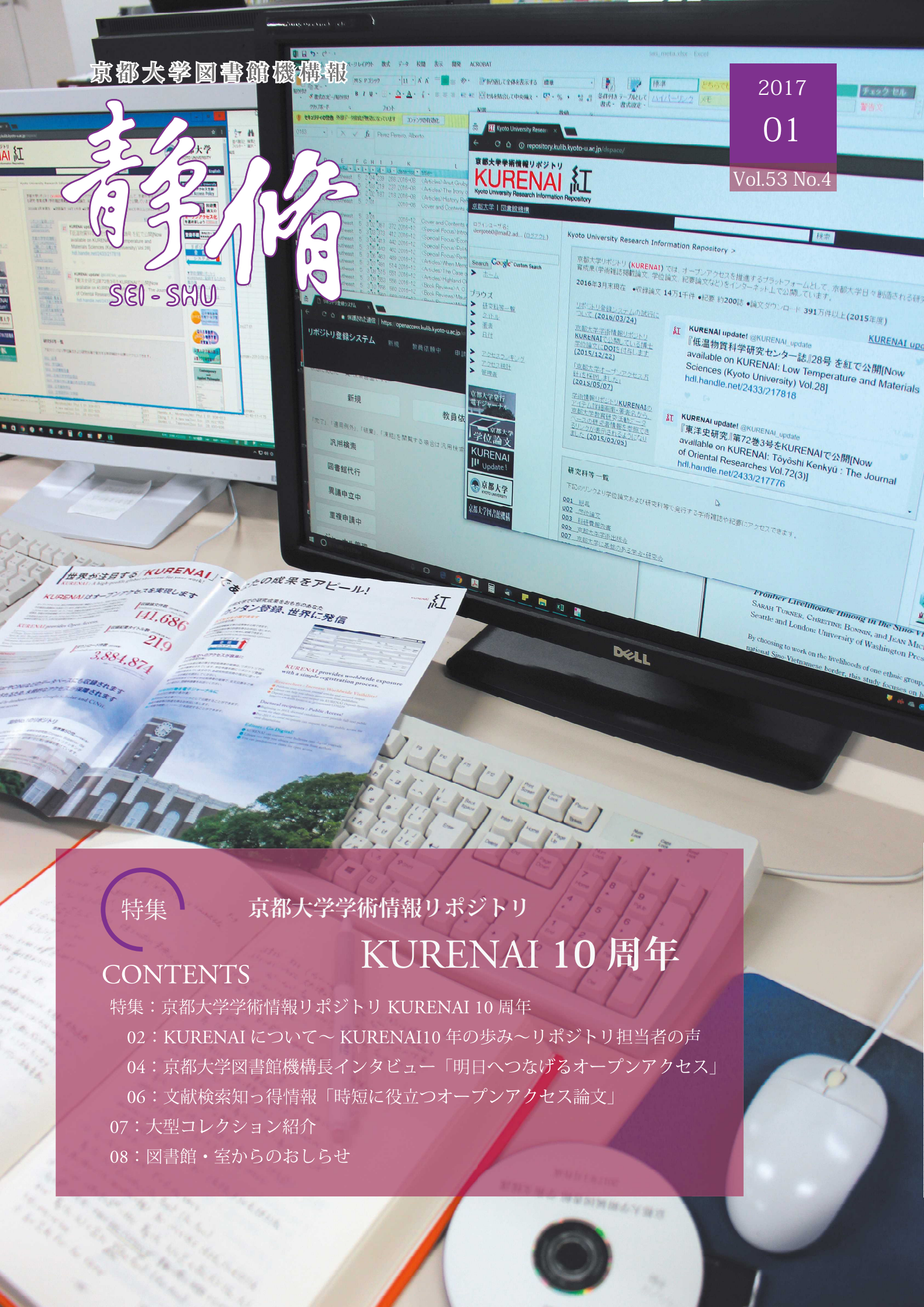
RIGHT:

# 青手傭

SEI-SHU

2017  
01

Vol.53 No.4



特集

京都大学学術情報リポジトリ

## KURENAI 10 周年

### CONTENTS

特集：京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 10 周年

02：KURENAI について～ KURENAI10 年の歩み～リポジトリ担当者の声

04：京都大学図書館機構長インタビュー「明日へつなげるオープンアクセス」

06：文献検索知っ得情報「時短に役立つオープンアクセス論文」

07：大型コレクション紹介

08：図書館・室からのお知らせ



## 京都大学学術情報リポジトリ KURENAI が 正式公開から 10 年を迎えました

京都大学学術情報リポジトリ  
**KURENAI** 紅  
Kyoto University Research Information Repository



京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」は、2006 年 10 月に正式公開され、2016 年 10 月に丸 10 年を迎えました。京都大学の研究・教育成果の「オープンアクセス」を実現するプラットフォームとして学内外から広く利用されています。「オープンアクセス」とは、誰もが学術研究成果に障壁なくアクセスし、利用できることを指し、その潮流は国際的にも高まっています。

KURENAI には、約 14 万件の本文ファイル付きの研究・教育成果が登録されています。それぞれの研究・教育成果にはメタデータと呼ばれる検索可能な文字情報を付与して登録しており、タイトルや著者だけでなく出版者、掲載誌等の情報で検索して本文にアクセスすることができます。また、学外のデータベースとも連携しており、例えば国立情報学研究所 (NII) が提供する CiNii Articles や、Google などでも検索することができます。

図書館機構は 10 年の間にさまざまな研究・教育成果を KURENAI に登録してきました。種類としては、紀要等の学内刊行物の論文が大半を占めますが、学位論文や京都大学に所属する研究者が著者となっている学術雑誌掲載論文も数多く登録されています。例えば、益川敏英名誉教授が 2008 年にノーベル物理学賞を受賞した際の論文や、山中伸弥教授が 2012 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した際に Key publication の一つとなった論文も、KURENAI にアクセスすれば読むことができます。また、京都大学学術出版会との連携により同出版会が発行する書籍もいくつか公開されており、論文以外にもさまざまな研究・教育成果が登録されています。

京都大学は 2015 年 4 月 28 日に「京都大学オープンアクセス方針」を採択しました。これは、京都大学の教員が生み出した学術論文等の研究成果を、KURENAI によりインターネット上で原則公開することを定めたものです。対象となるのは、京都大学に所属する常勤の教員が著者となっている研究成果のうち、2015 年 4 月 28 日以降に発行された学術雑誌に掲載された論文です。

ただし、これは京都大学オープンアクセス方針の対象範囲です。前述の通り、KURENAI には京都大学構成員の研究・教育成果であれば登録することができます。

### オープンアクセス方針の登録対象

常勤の教員が著者となっている研究成果  
2015年4月28日以降に発行

### KURENAIの登録対象

京都大学構成員の研究・教育成果すべて

京都大学は、オープンアクセスに関する取り組みを大学として重点的に進めています。これからも数多くの研究・教育成果を KURENAI に登録し、オープンアクセスとして公開していきますので、登録のご依頼や改善のためのご意見等はぜひご遠慮なくお寄せください。

京都大学学術情報リポジトリ KURENAI へはこちらから  
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/>



ご意見・ご要望は KURENAI の専用フォームからお願いします

## KURENAI 10 年の歩み

2006 年	10 月	正式公開
2007 年	9 月	登録件数 1 万件到達
	12 月	京都大学学術出版会との連携開始
2008 年	2 月	愛称を「KURENAI」に決定
	10 月	益川敏英名誉教授のノーベル賞受賞論文を公開
2009 年	10 月	学位論文要旨集を公開開始（印刷版廃止）
2010 年	1 月	Web サイトのデザインをリニューアル
	2 月	登録件数 5 万件到達
2012 年	10 月	山中伸弥教授のノーベル賞受賞 Key publication 論文を公開 登録件数 10 万件到達
2013 年	4 月	博士学位論文の全文公表義務化
2015 年	4 月	「京都大学オープンアクセス方針」採択
2016 年	1 月	学位論文に DOI を付与
	3 月	リポジトリ登録システム試行開始
	12 月末	登録件数約 14 万件

※登録件数は本文ファイル付きのもののみ計上



公開初期の KURENAI



2009 年頃の KURENAI

## ●リポジトリ担当者の声

KURENAI に登録してもらいたい論文がある場合、メールで個別に著者の方へ依頼していました。多くの先生方がお忙しいにも関わらず快くご回答いただいて KURENAI に論文を登録いただけました。2-3 年前のメールに丁寧にご回答をくださる先生もおられてありがたいです。

一方、長文を読まされる上に割と厚かましい内容のメールですので、かつては「KURENAI の趣旨に賛同できない」、「メールを二度と送ってこないでほしい」とおっしゃる先生もおられて、附属図書館ではお詫びとともにメールをお送りしないようにしていました。しかし、2015 年 4 月にオープンアクセス方針が策定されて KURENAI やオープンアクセスへご理解が高まったためか、そういう先生方からも KURENAI への登録申請をいただけるようになりました。また、知名度が上がったためか、業績リストを添えて登録申請いただき、(図書館で許諾条件を調査した上で) 何十件もの論文公開につながったり、以前はお返事のなかった学位論文の公開を許可いただけたりするようになりました。

学位論文といえばアクセスがずばぬけて多い KURENAI の人気コンテンツです。しかし、2013 年 3 月のインターネット公開義務化以前の学位論文については全文の登録が著者の任意のため、KURENAI では原則要旨のみの公開となっています。冊子の閲覧はあらかじめ手続きが必要で、学位授与大学または国会図書館関西館に出向く必要があります。また、全文複写には著者の同意が必要となっています。海外の閲覧希望者が、どうしても全文確認したいということで、都合をつけてわざわざ図書館まで見に来られることもあります。利用者からの閲覧希望で、現在は学外の研究者となられた著者とコンタクトをとり、KURENAI での公開許可を得られたこともありました。学位論文はまだまだ入手し辛い、しかし古くても新しくても一定の閲覧希望がある資料です。京都大学で学位を取得された方で全文未登録の方がいらっしゃいましたら、是非図書館へご相談いただきたく、この場を借りてお願い申し上げます。\*

\* 博士論文に出版社の論文が使用されている場合は許諾条件調査によって掲載が不可となることもあります。

[ 附属図書館学術支援課学術支援掛 ]

# 明日へつなげるオープンアクセス

京都大学では、2015 年 4 月、全国の大学に先駆けてオープンアクセス方針<sup>\*1</sup>を採択しましたが、この方針の採択に向けて先頭に立って活動したのが、引原隆士機構長です。本紙では、引原先生にインタビューを行い、大学とオープンアクセスについてお話をうかがいました。

—— まず、京都大学では全国に先駆けてオープンアクセス方針を採択したわけですが、その意義や背景についてお聞かせください。

オープンアクセス（以下、OA）についてはいろいろな立場があると思いますが、私が意識してきたのは次の 4 つです。まず、著者が論文を OA にすることで出版社のジャーナル価格高騰への対抗手段とするということ。次に、大学の研究成果を大学独自の発信ツールのもとで、戦略的に発表していくということ。3 つめは、研究者が研究成果をオープンにすることによって、それを公知にして守っていくということ。最後に、大学の「たこつぼ化」している研究分野をもう少し透明にしていくこと。それが研究のコミュニティを再構築することにつながると私は認識しています。

京都大学ではすでに KURENAI<sup>2</sup> を立ち上げていましたから、ボランティアベースで研究成果をオープンにするという素地は十分にあったと思います。そのうえで、京都大学が一番最初に OA の理念を世に打って出る、という姿勢を示したことが全学的に認められたのだと思います。OA は義務というよりも、税金を得て仕事をしている研究者としての筋を通すことだと思いますし、今それを始めれば次の世代も確実に踏襲していくでしょう。その結果として、先ほど挙げた 4 つのことが自然に進んでいくだろうと、そう思っています。

—— 「研究成果をオープンにすることによって守っていく」というのは具体的にどういうことでしょうか。

研究成果というのはアイデアなわけですが、これは何かの記録としてタイムスタンプが押されたものをどこかが保証しないと通じない。京大に属する研究者や学生の研究成果は、他のシステム、例えば学会や出版社に任せることなく、京都大学が保証することが必要なんです。ゴールド OA<sup>3</sup> として出版社にお金を払って自分の論文を OA にしている研究者もたくさんおられますが、お金がなければ自分の研究成果を知ってもらえない、というのはおかしい話ですよ。そういう意味では、KURENAI によるグリーン OA<sup>4</sup> は我々庶民研究者のためのツールではないか、と思っています（笑）。

—— 「研究コミュニティの再構築」については、いかがでしょうか。

大学って、一つの大きなコミュニティとされていますが、実はゼミに入った段階から「たこつぼ化」するんですね。なので、新しく大学に来る研究者や若い学生さんに、俯瞰的に研究が見えるようなソースを大学が提供することが重要です。今の日本では、一子相伝というか、習った先生のものの考え方をコピーすることによって人が育っています。最初の学理は広くても、だんだん一部だけが先鋭化され、深く掘り下げられていく。それが今までの学問の在り方だったわけです。外側にどんな論理があるのかは、容易にわからない、ほかの流儀に入っていかなければならないから。しかし、今、文科省が研究支援型のプロジェクトでエンカレッジしているのは、「分野を横断する」ということ。一番もとになった観点を別の視点からひっくり返して、裏側から見る、っていうことが重要なんです。この機会をみなさんすごく失っていると思うんです。新しい学問を求められるんだけど、何をすればいいのか分からなくて、深く掘った中で違う観点を見つけるためにみんな壁をつついてるような状態になっています。で、そこを透明化して、流動化して、情報が、学理がお互いに見えやすくなって、学習しあえる環境を作り上げるのが重要だと。若い学生さんが何かに染まる前に、お金をかけずに見ることができるし、出版された論文だけでなく、もう少しゆるしている段階のものも見えます。そういうことも含めて、OA は若い学生さんが分野を横断していくひとつの機会、ツールになるだろうと思っています。今はネットワーク社会ですから、京都大学でモデルを作り始めることで、大学を超え、国を超え、自然と広がっていくとは思っています。

—— 先に引原先生は、文部科学省の第 8 期学術情報委員会<sup>5</sup> に出席されましたが、その時に「パラダイムシフト」ということをお話されていました。

今、国は「一つの出来上がったパラダイムをシフトさせること」を要求しています。資本主義社会では、パラダイムが出来上がったら資本が投下されますが、固まったパラダイムではお金が動かない。市場に大きな変化があるときしかお金は動かないのです。同じように、学問でも、他の



ものと接することによって軌轍が生じ、新たな相手を説得する、あるいは高い理論を持って動いていく、ということになるのですが、大学で教えているのは、もう出来上がった分野がほとんどで、そこから新しいものをやりなさい、という学問の仕方を教えていない。それで必要になるのが、その外側にどんな学問があるか、ということを経験的に見られるようにすること。あるいは、先生方が外に向けてどんなふうの手や足を出しているかをきちんと見せてあげることです。それを見られる体制にすることによって、その外側に何があるか、ということを経験的に見られるようになる前の状態に戻してもう一度評価しておしてやる。パラダイムシフトや研究コミュニティの再構築を含めて今の課題や限界を知り、そういう過程を作りたい、と思っています。OAはそういう機会になるのではないかと。また、日本だけで守っているパラダイムはグローバル化しませんから、海外から揺すられて、批判を受けて変えていく必要があります。同じものの考え方を違う概念で、違う論理で構成することがパラダイムのシフトを生むわけですから、そのための準備をすることが、大学として一番重要なことだと思っています。

### —— だから、自ら研究成果をオープンにすることが重要なんですね。

自らが研究成果をオープンにすることで、外から刺激を与えてもらうという言い方もできると思います。昔は、よその研究室の文献を勉強していたら、他の学理を勉強するなんて何をやってるんだ、と言われるような時代もありました。でも今はそうではない。一つの考え方で自分が立ってきたことを認めたくて、ほかの考え方を使えば新しい世界ができるということを、みんなに言ってあげないといけない。学問が属人的になってしまってシステムティックになっていない、ということを見直した



引原隆士図書館機構長

め、みなさんが手の内を全部示してやるのが重要な、と思います。そんなことをすれば失うものが多い、と思う研究者の方も多いと思いますが、そんなに浅くないと思っています。

### —— 最後に、読者のみなさんにメッセージをお願いします。

OAの今後は、今の学生さん、あるいはこれから入学する学生さんにかかっています。人社系、理科系含めて科学というのは、個人のものでもないし、一つの国のものでも、一つの世代だけのものでもありません。地球上にいる人類がこのまま生きていくために残していくべきものは何か、ということを考える、そのための分類作業が科学だと思っています。情報を分類ができない、秘匿された状態に置いておくことはあり得ません。これまで図書館が本など紙の媒体でやってきたことは、そういう分類作業だったと思いますが、OAはその次の段階。今やらないといけないうのはそこだ、と思っています。ぜひ皆様のご協力をお願いします。

\*1 京都大学オープンアクセス方針

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13092>

\*2 京都大学学術情報リポジトリ KURENAI によるセルフアーカイブ

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13088>

\*3 ゴールド OA：APC（論文投稿料）を支払う等により、ジャーナルのオープンアクセスオプションを選択し、論文を出版と同時にオープンアクセスにするもの。

\*4 グリーン OA：大学等が構築・運用する機関リポジトリ等で論文をオープンアクセスにするもの。

※ゴールド OA、グリーン OA については以下をご覧ください

京都大学図書館機構 > オープンアクセスについて > オープンアクセスとは

<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13087>

\*5 2016 年 10 月 18 日開催 第 8 期学術情報委員会（第 8 回）

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/036/gijiroku/1380458.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/036/gijiroku/1380458.htm)



文献検索知っ得情報：

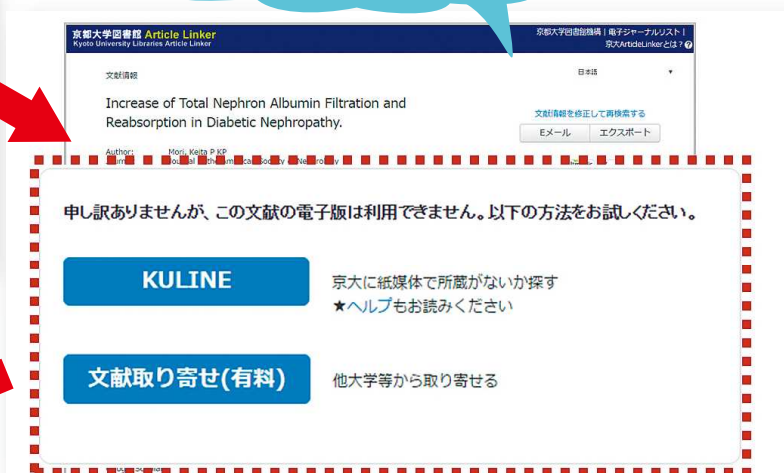
## 時短に役立つオープンアクセス論文

「データベースで欲しい論文がヒットしたけれど、京大の購読誌ではないからすぐには読めないのか。残念…」  
一度ならずこんな経験をされたことがあるでしょう。他機関からの取り寄せサービスが利用できるとはいえ、すぐに入手できるならそれに越したことはないところ。欲しい論文が電子ジャーナルで読めなくても、お金や時間をかける前に「オープンアクセス（OA）」で読めないかどうか調べてみましょう！



データベースでほしい論文を発見！  
京大ArticleLinker  
Find Full Text をクリック！

あれ？ 電子版は利用できない？  
電子ジャーナルで読めたら便利なのに…



Article Linker の画面を  
下にスクロールするとこんなボタンが？



無料で読める（＝オープンアクセス！）PDF ファイルを発見！

### ●LUCKY! の裏側には機関リポジトリ

Google Scholar でヒットしたのはたまたまではありません。上記の例では京都大学の機関リポジトリ「**KURENAI**」に登録されたコンテンツがヒットしています。もちろん他の大学の機関リポジトリ等で OA になっている論文もこうして入手することができます。ILL サービスを検討する前に、OA 論文を探す習慣をつけて効率的な文献検索を！

ここにも  
入口が…

文献検索データベースで直接オープンアクセスの論文が検索できる場合もあります。  
例えば、**CiNii Articles** ではヒットした論文が機関リポジトリで公開されていると



機関リポジトリ

アイコンが表示され、クリックすると収録先の機関リポジトリへ直接アクセスすることができます。

# The Economist Historical Archive 1843-2013

本コレクションは、1843年創刊のイギリスの政治経済誌（週刊新聞）The Economist の167年分の記事と関連データを収録したオンライン・データベースである。今日、全世界で購読契約数500万（プリント版約150万部）を超える同誌は、国際政治・経済記事を中心に科学・文芸・書評記事をも掲載し、また世界の主要地域を満遍なく取り上げる編集方針で知られ、世界の各分野のエリートに絶大な影響力を持つ。また本コレクションは、同誌のバックナンバーをOCR化し全文検索可能にしたものであり、利便性にも優れる。社会科学・歴史学分野に限らず、幅広い分野の多様な研究者・学生が活用する汎用的データベースである。

本コレクションの価値は、何よりも The Economist の、クオリティ・ペーパーとしての性格とその影響力にある。日刊紙よりも一歩踏み込んだ深い分析と、世界の多種多様な事象・争点に対する批判的分析・意見表明には定評があり、他誌の追随を許さない。投書欄は同誌掲載記事への読者からの批判からなり、各国政府当局やトップクラスの研究者らによる反論記事が毎号掲載される。既存のニュースメディアが衰退する中で、同誌が例外的に課金モデルで成長を続けていることは、同誌の記事の品質と世界的な影響力の傍証でもある。

ロンドンに拠点を置き、自由主義的論調を一貫して維持してきたことは、同誌の影響力の源泉であり、また利用価値を高めてもいる。同誌の歴史を通じ、占領や非民主的体制によって編集権が脅かされたことはない。ロンドンは世界的帝国の首都であったし、今日のグローバル化した経済の中でも世界中から資金・情報・人材を集める比類ない中心地であって、同誌の記事はそれを反映している。経済的自由主義・市場原理主義に偏すると評されることもあるが、左右のイデオロギー的立場には常に批判的で、社会的正義の問題ではしばしば絶妙の平衡感覚が発揮されている。

コレクションとしての魅力と利用価値としては、1) 超長期データの利点、2) 対象地域の広範さ、3) 主題の多様性・包括性・学際性を挙げることができるだろう。1843年から今日までの170年分の記事を収録し、しかも全文検索に対応していることの意味は大きい。例えば、「Fascism」の初出は1922年、「Value Chain」は1985年であるといったように、ある概念、思想、学説、社会現象について、その起点から今日までの変遷を容易に辿ることができる。今日では Google Books Ngram Viewer で主要欧州言語の語彙の出現頻度とその推移を簡単に知ることができるが、本コレクションでは、その具体的な用例——しかも上述のように世界的メディアでのそれ——をみることができるのである。もちろんこうした使い方は長期性の一つの活用例にすぎず、世界各地に関する基礎的な経済データ・企業情報も、多様な利用が可能である。

記事の地理的対象が地球規模であることも、大きな利点である。欧米先進国や、イギリスの（旧）植民地はもちろん、その他の地域についても豊富な情報が得られ、日本に関する記事も多い。幕末開港から今日までの日本報道を同一の基準で、しかもオンライン検索で簡単に辿れる資料を、他に探そうとしても困難であろう。

誌名から直接に連想されるのとは違って、記事の主題は幅広く、国際政治や経済に限られない。特にイノベーションや科学に関する記事は独自の存在感がある。自然科学や人文科学一般についても高品質の情報を含んでいる。総合大学である本学にふさわしい、全学的に幅広く活用可能なコレクションといえよう。

黒澤 隆文（経済学研究科教授）



☆The Economist Historical Archive1843-2013 への  
アクセス URL

<http://infotrac.galegroup.com/itweb/kyotodai?db=ECON>

- ・学内環境からアクセスしてください
- ・同時アクセス制限なし



※京都大学図書館機構＞データベース＞E から  
アクセスできます

[http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/erdb?c=erdb\\_alpha\\_e](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/erdb?c=erdb_alpha_e)





## オープンサイエンス推進状況下での大学図書館の役割を考える講演会を開催しました

京都大学図書館機構は 2016 年 10 月 21 日（金）、国立大学図書館協会近畿地区協会事業として、以下のプログラムで講演会を開催しました。

- ・「オープンアクセス、オープンサイエンスの展望と研究データ活用促進ならびに大学運営から見た大学図書館への期待」  
文部科学省科学技術・学術政策研究所  
科学技術予測センター上席研究官 林和弘氏
- ・「研究者識別子と名寄せーオープンサイエンス時代の学術情報環境の構築ー」  
国立情報学研究所学術コンテンツ課特任准教授 蔵川圭氏
- ・事例報告「京都大学のオープンアクセス推進の取り組み」  
京都大学附属図書館学術支援課課長補佐 富岡達治氏

参加者は 85 名で、京都大学内、近畿地区内にとどまらず、他の地区からも参加があり、テーマへの関心の

高さが伺えました。当日のアンケートでは「オープンアクセス、オープンサイエンスについて、図書館にとどまらない大きな文脈で説明があり理解が深まった」などの意見が寄せられ、大変好評でした。

講師と参加者による意見交換も活発に行われ、図書館の使命はどのような時代にあっても「学術環境を整える」ことであるという基本姿勢を持ち続けることが重要と再認識することができ、またオープンサイエンスの流れを、図書館の新しい役割をデザインする好機ととらえるべきであるという認識を共有することができました。

なお本講演会の資料は、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI によりインターネット上で公開され、オープンアクセスが実現されています。

林氏プレゼンテーション

<http://hdl.handle.net/2433/217342>

蔵川氏プレゼンテーション

<http://hdl.handle.net/2433/217341>

富岡氏プレゼンテーション

<http://hdl.handle.net/2433/217340>



## 図書館・室からのお知らせ

### ■京都大学図書館機構は

#### International Image Interoperability Framework (IIIF) Consortium に参加しました

IIIF の枠組みにより、京都大学が所蔵する古典籍・古文書などの電子化画像の公開と相互共有がこれまで以上に推進されることが期待されます。 <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1373150>



### ■人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターに

#### 台湾漢学リソースセンター (TRCCS) が開設されました

台湾国家図書館から TRCCS に漢学研究・台湾研究に関する図書が定期的に寄贈されるとともに、学内でデジタルリソースが利用可能となります。 <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1373308>



京都大学図書館機構報「静脩」(ISSN 0582-4478)

Vol. 53 No. 4 (通巻 192 号) 2017 年 1 月 31 日発行

編集:「静脩」編集小委員会(責任者:附属図書館事務部長)

発行:京都大学図書館機構

京都府京都市左京区吉田本町 36-1

TEL 075-753-2613

URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

表紙題字:附属図書館所蔵 西園寺公望公揮毫

### 今月の表紙

今月は KURENAI を支える附属図書館事務室の作業風景を取材しました。

京都大学の研究成果はここからインターネットを通して、世界へ発信されて行くのです。

